

## 本を読むことの現在

荒 井 訓

### 1. はじめに

20世紀の終わり近く電子メディアが発生し、18世紀末のヨーロッパに起きた読書革命<sup>(1)</sup>以降に広く堆積してきた印刷書籍を基層とする知の地層を揺るがしはじめたとき、ある者は新しい時代の幕開けを楽観的に語り、ある者は活字文化の崩落を予感して悲観的な言辞を連ねた。コンピュータが個人のツールとして普及した1980年代には、パーソナルコンピュータによる情報処理あるいは文書作成の高速化・効率化を歓迎する声と、コンピュータ・ディスプレイ上で読み書きすることは不可能であるとして、あるいは思考に根本的変化を強いるとしてパーソナルコンピュータを忌避する声が交錯していた。

今なおこれを忌避する声が完全に消えたわけではないが、1990年代にインターネットが世界の隅々まで張りめぐらされて以来<sup>(2)</sup>、自明な装置となったパーソナルコンピュータが引き起こした大波はそうした声を完全に飲み込んでしまい、その使用の是非を問うことすら無効になっている。1990年代のドイツの辞書には「メディア文盲 Medienanalphabet」という単語が登録されている(Horx 1991)。電子メディアについての知識をもたないこと、電子メディアを操作できないか、マージナルな知識しかもちあわせないことが一つの欠如として

認知されたということである。

しかし一方で、電子メディア革命によりペーパーレス情報社会が到来し、書物は消滅する、という展望が今のところ薄っぺらな未来論に過ぎないことも明らかになった。金属活字を用いて熟練の印刷工が組み上げていた組版は、キーボードからの電子作業へと変わり、印刷工程は電子化されている。したがって、現在の書物は厳密にいえばすでに活字印刷本ではないとはいえ、著者によって書かれた原稿が印刷され、製本業者が書物に仕上げ、流通業者が小売書店に配布するというシステムは依然として存続しているのである。それどころか、新しく生み出される書物の数は増えている。1980年の日本における新刊書籍点数は27,890点、2000年は61,940点であった<sup>(3)</sup>。20年間に新刊点数は2倍以上に増えているのである。比較データのとれるいくつかの国の2ヵ年の総出版点数を見てみよう<sup>(4)</sup>。

	1995年	1999年
日本	52,528	65,513
ドイツ	74,174	80,779
イギリス	95,064	110,155
フランス	42,997	49,808
米国	65,796 (1997年)	119,357

書物は消滅するどころか、漸増の傾向にある。

若者が本を読まなくなったといわれるようになって久しいが、各種の読書調査を解読した永江朗によれば、日本では社会全般に「読書ばなれ」が進んでいるわけではない。むしろ全体として本（書籍・雑誌）は今まで以上に読まれる傾向にある（永江 2002, 20）。「読書ばなれ」が進んでいるという通説は疑ってかからなければならないのである。だからといって書物は安泰であると断ずるの

もまた早計であろう。本のありようは確実に変わっている。さらにいえば、本を通じてものを考えるという知の枠組みが大きく変容している。統計的数字を参照するまでもなく、大学教員として学生たちに接してみれば、学生たちがますます「かたい本」を読まなくなりつつあるのは明らかである。「学生が本を読まない」という嘆きが含意するのは、「かたい本」、つまり日本では人文書という漠然としたカテゴリーで考えられる哲学・思想、歴史、宗教、心理・教育、批評・評論、そして古典や純文学書が読まれなくなったという認識であり、その嘆きは「本を読まなければならない」という前提に発しているが、それは定言的命令たりえるのか。人文系研究者の口からさえ「最近本を読まなくなった」ということばを聞くことも稀ではない。学術研究誌のオンライン化も進み、情報や知識を得るための手段としては本はすでに特権的に地位を失っている。電子メディアと活字メディアがせめぎ合いながら、知的活動の相貌が変わりつつあるというのが現状だろう。われわれは本を読むことについて再考すべき地点にいるのである。

電子のテキストが印刷書籍にとって代わることはないだろうと考えるひとびとは、電子メディアに対する印刷書籍の物理的な長所を指摘する。確かに、現在のコンピュータ・ディスプレイ上で文字を読むのは眼に負担がかかり、紙のページを読むほど快適なものではない。紙という安価なメディアに刷り込まれたテキストは、電源がなくては機能しない高価な機器がなくとも、いつでもどこでも読み書きができる<sup>(5)</sup>。しかし、印刷書籍が机や書見台がなくてはとても読めなかった高価なインキュナブラ<sup>(6)</sup>から、さまざま技術革新を経て今日の安価でポータブルなメディアに発展したように、テクノロジーの発展により、限りなく印刷書籍に近い、あるいはそれ以上に快適な「電子の本」が産出されることを想像するのは難しいことではない。開発が進められている電子ペーパーが、ほんものの紙のように軽く柔らかな、そして眼にも負担をかけない電子の紙に進化するのもそう遠いことではないかもしれない。

知的活動をする上で、本はその特権的地位を失いながらも依然として一次的なメディアでありうるのか。そうであるとすれば、本を読まなければならないという要請はどこからくるのか。そもそも本を読むということはどういう事態なのか。われわれが抱えている問題の核心はそこにあるだろう。しかし、この問いは、本の形而上学ともいうべきものから文化政策論さらには認知科学や脳科学まであらゆる分野に関わる問いであり、その射程はあまりに広い。小論が目ざすのは、本を読むことの現在をめぐる議論に寄与すべく、われわれが現在立っている地点を、電子メディアの台頭との関連において、メディア論的視点から照射することである。

## 2. 溶解するテキスト

書物の歴史、メディア論、人工知能研究等の広範な知見に基づいて「電子時代のエクリチュール」を論じたJ・D・ボルターの『ライティングスペース』（ボルター 1994）は、テキストの生成、蓄積、アクセスのスタイルの変化について考えるときに参照される基本的な文献だが、そのなかでボルターは電子テキストの性格を次のようにまとめている。

「電子テキスト<sup>(7)</sup>は意味、構造、視覚的表示といった要素が不安定になった最初のテキストだ。印刷や中世の写本とは違い、コンピュータは文章を書く上でいかなる局面もテキストの執筆や、読解の全体に先立って決定されていることを求めたりなどしない。ほんの一秒の間に消え去る電子を、シリコンと金属からできた回路に集めることで情報を記録しようというテクノロジーには、こうした落ち着きのなさが本来のものである。コンピュータの世界に存在するあらゆる情報、全てのデータは一種の制御された運動であるのだから、コンピュータ・ライティングにとっての自然な傾向とは、変化し、成長し、結局は消え去ることである。このような絶えざる運動のせいで、電子ライティングがそれ以前のタイプライティング、印刷、手書きといったテクノロジーに対して、まる

で万華鏡を覗くように多彩な関係をもつということも又、驚くべきことではない」(ボルター 1994, 51-52)

インキュナブラの製作者たちが手写本との差別化をはかるのではなく、最良の手写本に匹敵するものをめざしたように、「意味、構造、視覚的表示といった要素が不安定になった最初のテキスト」である電子テキストも、まずは印刷書籍に接近しようとする動きのなかで一般化してきたといえることができる。おそらくあらゆる技術革新には、それまでの類似技術との連続性を保ちながら革新をもたらすという逆説が貼り付いているからである。

1980年代後半にデジタルデータをフロッピーディスクやCD-ROM というパッケージに格納したものとして現れた電子書籍は、印刷書籍よりはるかにすぐれた検索機能を備えながら、既存の印刷書籍に似せて作られたものだった。次に登場したのは、1990年代に飛躍的に発展したインターネットを介して読者のコンピュータにデータファイルを直接届けるというものである。ホームページに表示された書名をクリックすることでデータがダウンロードされ、自分のコンピュータに電子書籍(ファイル)が作られるようになった<sup>(8)</sup>。電子書籍はもはやかたち(フロッピーやCD-ROM)を伴わない内容(コンテンツ)として存在するものになった。テキストが溶解したのである。出版社や印刷会社に蓄えられたデジタルデータや、PDF, HTML, プレインテキストとして大学や研究機関あるいはボランティアが作るサイトに蓄積された有料・無料のデジタルデータは、インターネット上の膨大なリソース群になった。

かくして溶解したテキストは、紙に書かれたテキストとはまったく異なる性格を帯びることになった。オンラインで入手されたテキストは、読む者がレイアウトや文字の大きさなどを好みに合わせて作り変えることができる。自分なりの本を作れるというわけだ。テキストを受ける側が読む方法を自分で決めることができる。しかし、根本的な革新はそうしたテキストの体裁の可変性にあるのではない。コンピュータが提供する新しいテキスト空間の特徴をもっとも

よく表しているのはハイパーテキストという概念である。

ハイパーテキストとは、1960年代にテッド・ネルソンがつくった造語であり、もともと文書中の要素としてのテキストと、それらの間の結合からなるネットワークを意味していた<sup>9)</sup>。その後テクノロジーの進歩により、ハイパーテキストは、文書中のテキストや静止画、動画、音声などが、関連するほかのデータ（オブジェクト）とリンクするように作られたコンテンツをも意味するようになる。テキスト中のリンクしてある語句を選択することにより、関連するデータを検索、表示できる。さらに、その中のリンクをたどり、関連するデータを探すことも可能である。インターネットはハイパーテキストを飛躍的に拡張し、インターネット上のさまざまなコンテンツとのリンクをも可能にした。今や原理的にはリンクの網の目は無限に広がっている。ボルターによれば、

「マイクロフィルム上に具象化しようがコンピュータ・メモリ上に具象化しようが、ハイパーテキストはトピックとその間の結合から成り立っている。そしてこの結合において、トピックは段落であったり、文、個々の単語、否、デジタル化されたグラフィックスであるかもしれない。ハイパーテキストは、書き手がはさみを持ちことばの上から見て適当なサイズに切り取った印刷書籍のようなものである。違いは次の点にある。印刷書籍の場合はそうすると無秩序な紙切れの集積になってしまう他ないが、電子的に実現されたハイパーテキストは単にそれだけでは終わらない、ということである。と言うのは、書き手はまた紙切れ相互の結合を示すように、電子的な結合の構成を決めるからである」「ハイパーテキストのネットワークは無限に拡張できるが、これは印刷テキストにはできないことだ」（ボルター 1994, 40）

書くという行為は言語観念を順序だてて展開する行為であるが、思考は決して線形的に流れていくわけではない。さまざまな連想によって思考は常に線形的な流れから逸脱しようとするものだ。このような、書くという行為における、いわば思考の本流と支流の交差的関係についてボルターは次のように述べてい

る。

「たとえ書き手がアウトラインから書き始め、それに忠実であり続けても、結果はいつも言語的要素のネットワークとなる。階層秩序（段落、節、章といった形をとる）は、言語的観念に秩序を課そうとする営みであり、その一方で言語的観念には常にそうした秩序を覆そうとする傾向があるのだ。印刷テキストはページや章といった秩序をあらわにするが、その根底にあって表だって現れているものとは異なるつながりを、連想関係は示してくる」（ボルター 1994, 36）そして「電子メディアでは、階層的な思考と、連想的な思考は、テキスト構造のなかで共存できよう。コンピュータはネットワークとツリーのどちらについてでもそれを維持し表現する機構を管理できるからだ」（ボルター 1994, 41）

ボルターのいう階層的な思考と連想的な思考の共存それ自体は、電子テキストにおいてはじめて可能になったわけではない。原理的には、グーテンベルク革命よりはるか前のこと、コデックス（冊子本）<sup>10)</sup>によりページという装置が生まれたときに、書くという行為における階層的な思考と連想的な思考の共存が可能になったのである。卷子本に代わって冊子本の支配が確立されると、それまでは複数の巻物に分けて構成すべきテーマを扱う場合も、一つの著作にまとめ、巻、部、章などに分けて構成することができるようになった。停止、反省、後戻りを読み手に要請するような種類の文章を書くことも自由になった。複雑な構造をもつ、つまり複雑で構築的な論理を構成するテキストが発生したのである<sup>11)</sup>。しかし、手写本であれ活字印刷本であれ、紙に書かれるテキストの構成は線形的かつ連続的にならざるをえない。ハイパーテキストでは、電子的なリンクによって、たがいに関連するオブジェクト（画像・音・テキスト）は非線形的に結びつけられる。テキスト間の結びつきの数はほぼ無限であり、流動的なものになる。

「印刷メディアでは、書き手は索引を使って別の順序を示すだろうが、そうした順序は常に、印刷書籍が持つ固定された順序に甘んじなければならない。そ

うした標準的な、その本のページ付けによって規定され、それ以外に示される順序はどれも、従属的なものに留まる。ハイパーテキストには、標準的な順序というものはない。どのパスを辿っても、同じように説得力があって適切な読解に導かれるし、その単純な事実がテキストに対してもつ読者の関係を根こそぎ変えてしまう。ネットワークとしてのテキストは、一義的な意味を持っているわけではない。それは支配原理が強制されるということがない、多元的なものである」(ボルター 1994, 41-42)

小論の観点からみれば、階層的思考と連想的思考を連動させる自由な空間を書き手に保証するハイパーテキストが、従来の読みの実践の仕方をも変えてしまうという点が重要である。「テキストに対してもつ読者の関係を根こそぎ変えてしまう」とはどういうことか。ボルターは次のように敷衍している。

「電子テキストの読者がテキストを読む際には、そのテキストには筆者が存在しており、かつ存在していないということに気づかされる。何故なら、テキスト構造の中に筆者が設定しておいた選択肢に読者は絶えず直面しているからである。読者がテキストを変更したり、新しい脈絡をつけたりする(ハイパーテキスト・システムの中の或ものがするように)ことを許容するプログラムなら、ゲームはさらに複雑になる。読者として我々は、自分自身に対して書き手となり、次に現れる読者のために、或いはたぶん次に自分が読むときのために、テキスト構造を決定するのだ」(ボルター 1994, 51)

今のところ電子テキストの究極のかたちであるハイパーテキストは、それ自体溶解したテキストであるだけでなく、著者と読者との截然たる区別をも溶かしさる装置であるということだ。つまり、電子テキストの最大の特性のひとつは、この著者と読者との双方的関係であり、もうひとつは、原理的に無限のリンクを張りうるハイパーテキストが、手写本から始まり印刷書籍によって育て上げられてきた「あるまとまりをもって閉じられたものとしてのテキスト」という感覚を崩壊させることである。冊子体の印刷書籍は、他の書籍と関連づけ



られるにしても、それぞれ個々にまとまりをもった思想を内包する装置であったが、電子テキストは原理的に開かれたテキストであって、輪郭をもたないことをその本質としている。それが知の連携や拡大や充実を意味するのであれば、電子テキストは従来の書籍を駆逐する可能性を秘めているかも知れない。しかし、それが思考の単なる拡散を意味するのであれば、最終的な一撃にはなりえないだろう。ボルターや、T・ネルソン（ネルソン 1994）、G・P・ランドウ（ランドウ 1996）らのハイパーテキスト論は思弁的・理論的な領域にとどまるものであり、ハイパーテキストが印刷書籍に代わりうるのかどうかはまだ予測の域を出ない。検証しうるのは、テキストをめぐる議論のなかでハイパーテキストがどのように位置づけられるのかということである。

### 3. 著者・テキスト・読者

1980年代に、コンピュータ・ゲームが盛んになり、シミュレーション世界に遊ぶことが現実の世界に歪みをもたらすかのような様相を見せたとき、これを「真剣さ、明晰さ、公共的ディスクリールの価値に対する危険」（Postman 1998, 43）とみる悲観論に対し、新しいメディアの擁護者たちはこの現実を「新しいコミュニケーション状況」（Bolz 1993）の始まりとみなした。その代表ともいえるN・ボルツは「コンピュータ・ゲームは新しい〈読み書き能力〉を獲得するための修練の場になっている」<sup>(12)</sup>（Bolz 1993, 223）といい、社会的コミュニケーションの物質的・技術的条件の転換を理論の根拠にし、コンピュータに下支えされたコミュニケーションは、古いメディアである書物も伝統的な発信者（＝著者）と受信者（＝読者）も必要としないとして、次のように述べている。

「私たちは、近代を導いてきたメディア、すなわち書物との関係を断った新しいコミュニケーション状況のなかに生きている。コンピュータや電子メディアの出現によって、マーシャル・マクルーハンがグーテンベルクの銀河系と呼んだ世界の終焉が近づきつつある」（Bolz 1993, 7）

「人文主義的文化の代表者たちが、文芸の字義的なものや、著者性や著作権といったディスクールの権力、そして創造性といった呪物にしがみついているのに対して、ひとびとはとうの昔に、新しいメディア条件のもとで、形式的・数的に、そしてアルゴリズムに導かれて動いている。ハイパーメディアは著者を必要としないし、データ・プロセッシングは天才をまったく用いないものにしてしまうのである」(Bolz 1994, 9)

現代メディア論の“旗手”であったボルツの主張はきわめて挑発的であり、ハイパーテキストが著者と読者の差異を回収してしまうとするボルターの議論をさらに進めて、著者の存在そのものを抹殺してしまっている。だが、著者の死を宣告したのはボルツが最初ではない。

すでに1960年代にR・バルトがテキスト論の立場から、起源としての「作者の死」について論じている。

「作者というのは、おそらくわれわれの社会によって生み出された近代の登場人物である。われわれの社会が中世から抜け出し、イギリスの経験主義、フランスの合理主義、宗教改革の個人的信仰を知り、個人の威信、あるいはもっと高尚に言えば、《人格》の威信を発見するにつれて生み出されたのだ。それゆえ文学の領域において、資本主義イデオロギーの要約でもあり帰結でもある実証主義が作者の《人格》に最大の重要性を認めたのは当然である。作者は今でも文学史概論、作家の伝記、雑誌のインタビューを支配し、おのれの人格と作品を日記によって結びつけようと苦心する文学者の意識そのものを支配している」(バルト 1979, 80-81)

バルトは、作品という考え方に対して、テキストとは、まず何よりも複数性のある場であると説いた。テキストの原義は織物である。一枚の布が縦糸と横糸の交錯によって織り出されるように、テキストはそれ以前または同時代の種々の文化的言語活動の引用の織物であり、さまざまな要素が織りあわされたものとして現れている。

「テキストとは多次元の空間であって、そこではさまざまなエクリチュールが、結びつき、異議をとねえあい、そのどれもが起源となることはない。テキストとは、無数にある文化の中心からやって来た引用の織物である」(バルト 1979, 85-86)

「一遍のテキストは、いくつもの文化からやって来る多元的なエクリチュールによって構成され、これらのエクリチュールは、互いに対話をおこない、他をパロディー化し、意義をとねえあい、そのどれもが起源となることはない」(バルト 1979, 88)

テキストは、ひとりの作者が一義的に構築する世界ではなく、多元的な要素が交錯する複数性の場であるということだ。この多元性の収斂する場は作者ではなく、読書行為をとおして意味を産出する読者の側にある。

「読者とは、あるエクリチュールを構成するあらゆる引用が、一つも失われることなく記入される空間にはかならない。あらゆるテキストの統一性は、テキストの起源ではなく、テキストの宛先にある。しかし、この宛先は、もはや個人的なものではありえない。読者とは、歴史も、電気も、心理ももたない人間である。彼はただ、書かれたものを構成している痕跡の全てを、同じ一つの場を集めておく、あの誰かにすぎない。」(バルト 1979, 89)

テキストを読む読者は、テキストの意味生成にあたかも共同執筆者のように自ら参加する、生産行為を行う主体である。それゆえ、エクリチュールにその未来を返すべき読者の誕生は、「近代の登場人物」である「作者の死によってあがなわれなければならない」(バルト 1979, 89) と、バルトは作者の死を宣告したのである。

バルトの理論は、その後J・クリステヴァらに引き継がれて展開され、ボルツの理論もバルトの系譜につながっている。ヨーロッパの文脈を遡ってみると、バルトがその死を宣告した〈作者〉という概念が色濃く浮かび上がってくるのは19世紀のはじめにF・D・E・シュライアー・マッハーが近代的な解釈学

を基礎づけた頃のことである。

それまで個別解釈学としては新・旧約聖書解釈学と古典文献解釈学があったが、シュライアーマッハーは講義というかたちで、一般的な「理解の技術」(Schleiermacher 1959, 79)として、解釈における普遍化・総合化の道を押し進め、一般解釈学の綱領を展開した。シュライアーマッハーの説く「理解の技術」においては、とりわけテキストとその一次的なメディア形式である文字が重要視され、解釈者の課題はその意味の解読であるとされた。端的に言えば、テキストを著者による産出物にとらえるところに彼の出発点があった。

シュライアーマッハーによれば、理解とは、文法的契機と心理学的契機という二つの契機の融合体である。つまり、理解とは、言語的契機と心理的契機との二重性からなり、言語を個々の人間が自らの思考を伝達するための手段とみなせば、心理学的契機が高次のものになり、逆に、言語がすべての個人の思考を制約するものと見なせる限りにおいては、文法的契機が高次のものとなる。テキストの言語的・文法的な構成に注目して方法的・規則的に行われる理解に対して、感情移入を契機として著者の個性からテキストを理解することは、解釈者の心理学的課題とされる。

「この課題は二重のものを含んでいる。(…) そのひとつは、ひとつの作品の全体的な根本思想を理解することであり、もうひとつは、個々の部分を作者の生から理解することである。前者は、そこから一切が展開されるところのものである。後者は、ひとつの作品においてもっとも偶然的なものである。しかし、両者は、著者の個人的な固有性から理解されねばならない」(Schleiermacher 1977, 185)

「著者の個人的な固有性」が、個と全体の循環的解明、すなわち、個を理解するためには全体を理解しなければならない、逆に、個を理解するためには全体を理解しなければならないという解釈学的循環に結びつけられて、テキスト理解の基調をなしている。

以後この考え方は、20世紀にいたるまで引き継がれていく。1900年にW・ディルタイは、解釈学とは「持続的に固定された生の表出を技術的な規範にそって理解すること」である(Dilthey 1957, 319)と表現し、H-G・ガーダマーは1959年に、次のように書いている。

「個々の単語が文の連関に属しているように、個々のテキストはひとりの著者の作品の連関に属している。そしてまた、一人の著者の作品は当該の文学ジャンルの全体ないし文芸の全体に属している。しかし他方、その同じテキストは、ひとつの創造的瞬間の顕現として一人の作家の魂の生の全体に属している。そのつど、このような客観的および主観的な性質をもつ全体のうちにおいてはじめて理解は完成されることができる」(Gadamer 1977, 54-55)

20世紀後半になっても、たとえばM・フランクの「個的普遍」という概念は、著者の個性と、著者が固有の仕方でもテキストにおいて応用する「ある時代の規範の総体」(Frank 1985, 23)との結びつきを意味している。シュライアーマッハーからフランクにいたる解釈学的伝統においては、著者とテキストの関係が、言語の客観的秩序という全体のなかへ著者が固有の仕方に関わるものと考えられてきたのである。

こうした考え方は、1960年代から1970年代にかけて、フランスから起きた構造主義の潮流による揺さぶりを受ける。ガーダマーが、解釈学の課題を「もともになる思想的産出物の再生産的反復」(Gadamaer 1970, 1064)としているように、解釈学においては、著者が書き記した意味を反省的に再生産することが目標とされるのに対して、構造主義は、独創的な固有の著者という解釈学の要素そのものを無効にした。端的にいえば、人間はすでにシステムとしての性格をもつ社会の中に生まれおち、そこで位置と機能を与えられて個人になるのだという構造主義の見方においては、個人はひとつの固有の存在であるよりは、むしろ機能であり、諸関係の束であり、関係あるいは機能としての人間という考え方が強く押しだされるからである。テキストは、もはやひとりの著者による

意味の創造ではなく、基盤をなす構造の表出とされる。代表的な構造主義的文学理論家の一人である T・トドロフによれば「どの作品も、それ以上にはかに普遍的な抽象的構造の表出としてのみ見なされる。表出たる作品はその抽象的な構造の現実化にすぎないのである」(Todorov 1973, 108)

このような著者の相対化を象徴的に表現したのが、1968年のバルトのあの「作者の死」というテーゼであった。バルトは、テキストをたえず流動する引用の織物と捉え、この流動状態に作者と読者がともに参入することによってテキストの意味が無限に産出されると説いたのだった。著者をいわばテキスト行為の単なるリソースへと引き下げたのである。

しかし、バルトが「作者の死」を宣告した翌年に、M・フーコーはバルト批判ともいえる論考『作者とは何か?』を発表し、次のように問題提起している。「《誰が話そうとかまわないではないか》— この無関心のなかに、今日のエクリチュールの倫理的原則、おそらくもっとも根本的な倫理的原則が明確な姿を見せている。作者の消失は批評にとって、これ以後日常的な主題となっている。だが肝心なのはその消滅を改めてもう一度確認することではない。作者の機能が作用する位置を、空虚な — 関心を惹かぬものではあるが同時にまた拘束的な — 場として標定しなければならないのである」(フーコー 1990, 11)

難解であるにもかかわらずベストセラーとなり、さまざまな領野に影響を与えた『言葉と物』(Foucault 1966)において、フーコーは、「人間」という概念が、時代に固有の考え方の枠組み — フーコーの用語でいえば、エピステーメー — において、それまで「王や王妃」が占めていた「王の場所」を満たすようになったのは、19世紀初頭のことにすぎないとして、「人間」を歴史的産物とした上で、「言語」が再び「人間」を「王の場所」から追放する「人間の終焉」を予言した。「人間の終焉」を説いたフーコーは、バルトと同様に、作者は固有の実体的存在としてではなく機能として考えなければならない、という。しかし、バルトが、テキストの統一性はテキストの起源である作者にではなく、そ

の宛先たる読者にあるとしたのに対して、フーコーは、作者を構造のなかに消失してしまうものとしてではなく、テキストの統一性の原理として捉えなおした。フーコーによれば、作者を機能として作用させる考え方は次のようなものである。

「作品の中での若干の事件の現存と、それら事件のさまざまな変貌、変形、変更に対する説明（作者の伝記、作者の個人的展望の標定、その社会的所属あるいは階級的位置の分析、その根源的投企の解明による説明）を可能ならしめるなにかだ、という考え方である。同様に、作者とはエクリチュールのある一種の統一性の原理だ、— あらゆる差異はすくなくとも、生成、成熟、影響の原理によって解消されるべきであるとする考え方。作者とはまた、一連のテキストのなかに繰りひろげられることのある諸矛盾の超克を可能ならしめる何者かだという考え方。（…）もうひとつ付け加えれば、作者とは作品のなかでも、草稿のなかでも、書簡のなかでも、断片のなかでも……、それぞれに完成度の差はあっても、同一の価値を担って、はっきりと顕現するところの、ある表現の中心だという考え方である」（フーコー 1990, 45-46）

そして、統一性の原理としての作者は、多数の言説を抱え込み「複数の立場＝主体を同時に成立せしめうる」ものであるという。

「機能としての作者は言説の世界を取りかこみ、限定し、分節する法的制度的システムに結びつく。それは、あらゆる言説の上で、あらゆる時代を通じて、文明のあらゆる形態において、一律に同じ仕方で作用するものではない。それは、ある言説をその産出者へと自然発生的に帰属せしめることによって定義されるのではなく、特殊で複雑な一連の操作によって定義される。それは純粋かつ単純にある現実の個人に送り返すのではなく、複数の自己、分類を異にする個人が占有しにやってくるのできる複数の立場＝主体を同時に成立させることができる」（フーコー 1990, 50）

テキストの統一性の原理であるとしても、その作者は複数の立場を成立させ

る統一性であり、フーコーが復活させた作者の姿は、もはやバルト以前のそれではない。

バルト／フーコーの分析は、テキストをめぐる以後の言説を支配しているとはいわないまでも、現代においてもなおあらゆる文芸理論の地下水脈をなしている。ボルツのメディア論は、そこから汲み上げた水に強い毒素あるいは発泡剤を加えたものということもできるだろう。ボルツは、テキストに支えられた伝統的コミュニケーションが終焉にあると見ている。今や、新しい電子メディアのもとで、従来の著者と読者の関係とともに、テキストの帰属性そのものもはや必要としないコミュニケーションの時代であるというのである。

「かくして、〈作者とは何か？〉という問いはドキュバース (docuverse) <sup>(13)</sup>において解決する。書かれたものはすべてデータバンクに吸収され、そこで他の書き手たちによって再利用されうる。そういう場では、作者を特定できない、すなわち作者のないテキスト、いわば読むことにおいて書かれるようなテキストが成立する。(…) ここでは文芸活動<sup>(14)</sup>は集団的過程 (kollektiver Prozeß) として認識されるようになる。まずはじめに、技術的な代用品が用意され、旧来のユートピアを代行する。つまり作者と読者の差異を回収してしまうのである。」(Bolz 1993, 223)

しかし、このようなドキュバースという空間は、著作権という法的規制が厳然として存在する限り実現不可能である。シュライアーマッハーが「著者の個人的な固有性」に焦点をあて、彼とともに後世の文芸理論に大きな影響を与えたF・シュレーゲルが「作者と読者は文芸上の概念である」(Schlegel 1981, 75)と書きとめた1800年頃、ヨーロッパでは本の流通システムが整備され、テキストに対する所有制度が制定され、著作権や、作者と出版社との関係や、複製・転載権などについての規則が規定された。それ以前、つまり言説が「ひとつの産物、物、財産ではなかった」(フーコー 1990, 38) 時代に現代のテクノロジーを持ち込むならば、ボルツのいうドキュバース空間も可能かもしれないが、ま



すまず匿名化する傾向をもつ電子メディア社会においても、文体そのものの価値、独創的な着想、新たな知の獲得、それらが一人の著者に帰属しないと認知されるということは今のところ幻想でしかない。著者に社会的安定性を保証してきた法的規制の消滅も資本主義の利益社会においては考えられない。しかし、ボルツの綱領は、電子メディアがもたらした事態が、19世紀に作り上げられ1960年代以降に追究の対象になった、テキストをめぐる〈著者と読者〉という根本的な問題に通底するものであることを先鋭的に示している。

世界的規模で知のあり方に対する問い直しが展開された1960年代後半から70年代にかけて、〈作者とは何か?〉という問いとともに、〈読者とは何か?〉についての問い直しも、アメリカのS・フィッシュ、ドイツのW・イーザー、H・R・ヤウスらによって行われた。

フィッシュは、テキストの意味は読者がそのテキストを受け止める行為の中で生成されると主張した。当たり前のことのように聞こえるこの見解は、テキストの意味は読む行為とは無関係に、それに先立ってテキストのなかに存在しているとされていた従来の考え方に対抗するものとして意義をもっていた。あるいはまた、作者中心主義に代わり、1930～50年代にイギリスおよびアメリカでさかんであったニュー・クリティシズムを中心に、作品としてのテキストの自立が主張され、あらゆる作品外の情報を遮断し、作品それ自体が閉じられたひとつの世界として扱われるという傾向を相対化する意義をもっていた。読むという個人の行為のなかで意味が生成されるとすれば、解釈は恣意的なものになり、読みの無政府状態が生じることになるが、フィッシュは、読みに先立って特定の歴史的・社会的条件のなかで解釈戦略を共有する「解釈共同体」という概念を導入し、それが一定のテキスト理解をもたらすと考えた（Fish 1980）。

ヤウスは、読者を、読む行為により積極的に作品の具体化に関わる存在と捉

え、作品は受容によってはじめて姿を現わすと考えた。彼の『挑発としての文学史』（Jauß 1970）は、読者を軸とする文学史の構築をめざしたものだ。ヤウスは、文学の歴史の正当な認識は、読者をとおしてこそ行なわれるのだと主張した。ただし、この読者とは、個人の読者ではなく、コードを共有する読者群であり、これが文学史のパラダイムを形成していくものと考えられている。特定の時代の読者が文学テキストを判断する際の基準となるこのパラダイムを、ヤウスは「期待の地平」と呼んだ。この「期待の地平」の概念は、フィッシュの「解釈共同体」が表現している枠組みと類似している。

イーザーは、ヤウスのような文学受容史というマクロな視点とはらず、テキストと読者の関係に焦点を当てたミクロな視点を取り、読書行為を、発信者と受信者が共有している文化的コードやコンテキストに基づいて、受信者＝読者がテキストを再構成するものとして捉えた（イーザー 1982）。

ここではそれぞれの理論の詳細には立ち入らないが、テキストは読者との相互作用において意味をなし、読者は何らかの解釈コードのうちにあるという理解が彼らの読者論に共通している点に注目しておきたい。アナール派による書物の社会史研究を継承し、現代の書物・読者研究を牽引する R・シャルチエが提唱している「読者共同体」という概念（シャルチエ 1996）は、シャルチエ自身がいうように（シャルチエ 2001, 165）、フィッシュの「解釈共同体」に、より歴史的、社会学的な意味を付加したものであり、「同じような能力、同じコード、同じような意図や目的で読書を実践する習慣」を意味している。シャルチエが引いている次のミシュル・ド・セルトーの文章は、フィッシュ、ヤウス、イーザーらに始まり、電子テキストをも視野に入れたシャルチエに至るまでの読書論の中心軸を簡潔に言い当てている。

「新聞だろうとブルーストだろうと、テキストはそれを読む者がいなければ意味をなさない。テキストは読み手とともに変化してゆく。テキストは、自分のあずかりしらぬ知覚のコードにしたがって秩序づけられるのである。二種類

の期待が組み合わされてできる共犯と策略のゲームによってはじめてテキストとなるのだ。つまりひとつは読みうる空間（字義性）<sup>リテラリテ</sup>が組織する期待であり、もうひとつは、作品の実現化に必要な歩み（読むこと）が組織する期待である」（セルトー 1987：シャルチエ 1996, 20）

1960年代に始まり現代に至るこれらの読者論は、「テキストの統一性は、テキストの起源ではなく、テキストの宛先にある」というバルトの主張と表裏の関係にある。作者も読者も、それぞれ文化的コードによって構造化されつつテキストとの相互作用において意味を産出すべき存在であるのだとすれば、ハイパーテキストはまさにそのありようを支援し、具体化するテクノロジーであるに違いない。しかし、だからといって、そのことがただちにボルツのいうような著者と読者の差異が消滅する空間が知の地表を覆い尽くすようになることを意味するのではない。われわれは2004年現在、「近代を導いてきたメディア、すなわち書物との関係を断った新しいコミュニケーション状況」（Bolz 1993, 7）を生きているのではないし、「コンピュータや電子メディアの出現によって、マーシャル・マクルーハンがグーテンベルクの銀河系と呼んだ世界の終焉」（Bolz 1993, 7）がすぐに到来するということもありそうにない。冒頭で述べたように、21世紀に入っても、印刷書籍の数は増大こそすれ、減少傾向にないことからみてもそれは明らかだ。あえてシャルチエの一文を引けば、ハイパーテキストという「この新しい書物が、はたして固有の読者を生み出すことができるかどうかは、まだ明らかではない。読書の長い歴史においては、技術的な革命が実際の読書のいとなみに影響するまでに長い時間がかかることが多い。冊子本や印刷術が発明されたからといって、すぐに新しい読書のかたちが誕生したわけではない」（シャルチエ 2000, 27）

電子百科や電子ジャーナルで関連項目や注釈をたどっていくなど、情報の検索にはハイパーテキストの特性を享受するが、小説や論文を読む場合には、リンクをたどっていけばいくほど迷宮のなかに入り込んでいくような感覚にとら

われ、違和感を覚えるひとが少なくないはずだ。ハイパーテキストが、〈著者・テキスト・読者〉の関係を変容させる潜在的可能性をもっているのは確かであろうが、それがもたらす新しい思考様式・認知様式に人間がすぐに馴化できるわけではない。

社会学的書物史の領域から影響力のある発言を続けているR・ダーントンが「新たな本の時代」に提唱するようなかたちの本の場合はどうだろうか。

「私が主張したいのはたんなるデータの集積でもないし、データバンクへのアクセス（いわゆるハイパーリンク）を提供することでもない。そんなものは、従来の脚注を詳しくしたものといえて変わりはない。私が提案したいのは、何層にもなったいわばピラミッド型の構造である。一番上の層には、テーマを簡潔に述べたものを置く（これはペーパーバックとして出版することも考えられる）。次の層には論旨の各側面をさらに敷衍したものを収める。順序立てて並べるのではなく、それぞれが完結した部分として第一層の解説を提供する。三番目の層には資料を収め、各資料には注釈を添える。四番目の層には、理論的・歴史方法論的な観点から、これまでの研究書や論文からの抜粋を収める。五番目の層には、大学の授業用にディスカッションのテーマの例やモデルとなる講義概要などを収める。そして最後の六番目の層には出版の適否に関する原稿閲読者のレポートや、著者と編集者のやり取り、読者からの手紙（この部分は、さまざまな読者グループに読まれるにしたがってデータ量が拡大していく）を収めるという具合だ。

こうした新しいタイプの本が出現すれば、当然読み方も新しくなる。上層部だけを読んで満足する読者もいるだろうし、垂直にあるテーマを掘り下げていき、著者の議論を支持する他の論文や資料まで読もうとする読者もいるだろう。また気の向くままにあちこちを渡り歩いて自分の興味に適合する部分を見つけたり、自分なりの構成に組み直す読者もいるかもしれない。いずれの場合にも、読者は必要なテキストを自分の好きなようにプリントアウトし、綴じる

ことができる。コンピュータの画面は欲しい部分を抜き取ったり、検索したりするために使い、集中的な読書をする際には印刷した本か、ダウンロードしたテキストを使えばいい」(Darnton 1999)

ダーントンの提言は、一定の売れ行きの見込めない分野における学術書の出版を大学出版部が打ち切ってしまうなど、アメリカの学術出版が絶滅の窮地に陥っているという危機感に発し、モノグラフの新機軸を打ち出したものだが<sup>(45)</sup>、そのスタイルは、基本的に検索にはリンクを活用し、集中的に読む場合には従来型の線形的なく読みをするというものである。著者と読者の双方向性が可能になるという利点は、テキストそのものの性格という観点からみれば副次的なものにすぎない。ここに見られるのは、新旧のテキストの排除的關係ではない。

メディア革命ということばが広まり始めた頃、それが読書に及ぼす影響はある意味で過大評価されていた。その影響は1980年代に予想されていたのとは質的に違うものだった。たとえば、ドイツで精力的に進められている読書に関する実証的研究<sup>(46)</sup>は、全体としては読書に割かれる時間は減少傾向にあり、習慣的な読者と、あまり読まない・まったく読まない者との二極化傾向が進んでいることを示し<sup>(47)</sup>、それとともに、印刷メディアと電子メディアが排他的な関係になるだろうという予測に反して、印刷物を多く読む者は、電子メディアもよく利用している — ただし、その逆はいえない — ということも明らかにしている。新旧のメディアは補完的な関係にあるのである。

上の引用でダーントンの提唱しているのは新しいモノグラフのかたちではあるが、文学を含めた多くの種類のテキストが今後そのようなものとして出現してくるのかもしれない。ブラウン大学のJ・P・ランドウは『ハイパーテキスト』(ランドウ 1996)において、教育の場において彼らが行なった、ハイパーテキストによる共同作業の種々の実践例を報告している。このような試みはいったんところで行なわれているだろう。だが、ドイツにおける各種の調査や東京

大学社会情報研究所の調査（橋本他 1999）によれば、インターネットの利用目的として大部分をしめるのは、仕事や趣味や生活上必要な情報を得ることとEメールによる知人との連絡であり、メディアの特性を生かした情報発信という利用の仕方は相対的に低いレベルにとどまっている。この傾向を大きく変える要素は現在まだ見当たらない。ネットワークの整備が進んでいる他の諸国においても事情はあまり変わらないと思われる。情報収集および通信という領域でのシフトは確実に進んでいるが、印刷テキストからのシフトをもたらすような電子テキストの実践的成果の峰ないし山脈はまだ現われてはいない。

電子テキストの台頭は、テレビやラジオや映画といったメディアとともに、印刷書籍を文化における特権的地位から追い落とし、出版産業に多大な影響を与える複合的な要因のひとつであるには違いないが、決定的な要因ではなく、本を読むことの現在を考える上で、電子テキスト、換言すれば、ハイパーテキストの出現の意味は、むしろ、上に見てきたようなテキストというものの性格を鮮明に浮かび上がらせているところにある。

#### 4. 文芸的公共圏・教養

電子テキストの特性を切り口にしてテキストをめぐる議論をたどってみると、その問題性の中心に見出されるのは、〈著者・テキスト・読者〉の関係を構造化する共通の文化コードというキーワードだった。J・ハーバーマスが『公共性の構造転換』（Habermas 1979：初版 1962）において、ヨーロッパ近代社会の生成と変遷という歴史過程から抽出した「文芸的公共圏<sup>(8)</sup>（Literarische Öffentlichkeit）」というカテゴリーもそれとアナロジーの関係にある。ハーバーマス以後、「文芸的公共圏」ないし「文化的公共圏」は近代社会を考えるためのひとつのトポスとなり、たとえば、読書の衰退を文化的公共圏の衰退と捉える吉見俊哉は、「ゲーテンベルク革命以降、近代の活字文化が成し遂げた最大の功績は、王や領主の権力を見世物的に誇示してきたそれまでのスペクタクル的

な公共性に変わり、印刷された書籍を通じて広範な人々に開かれる新しい公共的な知を可能にしていったことであった。この公共性は、根深くナショナリズムと結びつきもしたのだが、(…)身分や階級、地域、エスニシティなどの壁を突破する傾向をもっていた」(吉見 2000, 14)と述べている。以下では、上に見てきたような文脈において、文芸的公共圏というカテゴリーについて再検討してみたい。

ヨーロッパでは18世紀に多様な社会的転換と結びついて、それまでの読者とはハビトゥスを異にする読者が生まれた。その要因として第一に挙げられるのは、この頃に書籍流通システムが生み出され、学者や聖職者に占有されていた書籍が一般にも入手可能になったことである。産業の発達により、読書に使えるような余暇といえる自由な時間がようやく18世紀に生れたことも要因のひとつである。だが、それ以上に重要な意味をもっていたのは宗教の後退だった。宗教の支配力が後退するにつれ、キリスト教のドグマは、成層構造をもっていた古いヨーロッパ世界を統合する象徴から、社会的統合機能をもたない意味装置に変質していった(Luhman 1992, 102)。宗教の後退によってはじめて読者は精神修養という要請から解放され、文芸をそれ自体として享受するようになった。

1790年代のドイツにおいて激しく行なわれた「読書熱」批判<sup>(19)</sup>は、小説類の出版点数が年々増加し<sup>(20)</sup>、R・エンゲルジングが「読書革命」と呼んだ、聖書、数冊の祈祷書、歴書など限られた数の本の反復的読書から多数の本を次々と読む拡散的読書への転換が進行するなか、「読書熱」が社会的統合機能をもっていた宗教的・道德的教化からひとびとを離反させているというところに向けられたものである<sup>(21)</sup>。音読にかわり、それまではエリートの読み方だった黙読<sup>(22)</sup>が一般に浸透してくるのもこの頃のことである。E・シェーンによれば、孤独にひとりで読むことを強いる小説という文学形態の流通・浸透が黙読の一般化を促し

たのである (Schön 1987)。だが、このような新しいハビトゥスを身に着けた読者は、その内向的な外観に反して、「文芸的公共圏」を形成するようになる。

1713年にハンプルクで発行された“Der Vernünftler”を嚆矢とし、18世紀のドイツではいわゆる道徳週刊誌が盛んに発刊された。世俗的内容をも盛り込んだこれらの雑誌を読むことは、ヴィットマンによれば「商人や学生、教養ある女性たちや真面目な役人にとって、たんに無為の楽しみではなく、ほとんど倫理的な義務であった。道徳週刊誌は倦むことなく、このメッセージを発信し、それにより、道徳週刊誌そのものだけでなく、読書全般への興味を喚起した。道徳週刊誌はドイツにおける非専門的・非学問的雑誌出版の胚細胞となったのである。(…) 書籍市場の他のいかなる分野もこれほど急速に増大したことはなかった。1741年と1750年の間に260の雑誌の創刊が確認され、1751年と1760年の間でさらに331誌の創刊が確認できる。これらの雑誌において、アクチュアルな定期的コミュニケーションの、およそ考えられる限りのすべての知の領域を征服したいという、抑えがたい衝動が明瞭に現れてきたのである」(Wittmann 1991, 180)。一方、1770年代以降、私的および商業的な読書サークルがあらゆる都市に普及し、18世紀末にはドイツで270以上の読書サークルが存在した。それはたいていの場合に、特別の部屋をそなえ、雑誌や新聞を読み、読んだ事柄について談論する機会を提供するクラブであって、そこから「論議する公衆」が現れてくる (Habermas 1979, 93)。こうしたクラブの主たる構成員は、実業家と大学教育を教育を受けた人々 (学者、牧師、管理、医師、法律家、教師など) であったが、「論議する公衆」は必ずしもこれら都市部の教養市民層に限られてはいなかった。

18世紀に起きた産業構造の変化は、農村部においても伝統的なメンタリティーや生活形態の包括的な世俗化と弛緩をもたらし、フランス革命の衝撃は、宗教改革以来はじめてドイツの農民をも政治的に行動する主体に変えていった。農村部でもニュースに対する関心が高まり、学校の教師や学生、聖職



者や郵便局長らが居酒屋などで新聞を読むのを聞き、議論の輪ができた。新聞が農民にも拡散型読書へのアプローチを可能にしたのである。ドイツにおける識字率は、1740年頃には全人口の15%、1800年頃で25%に過ぎなかったと見積もられてはいるが（Schenda 1977, 44）、18世紀末には、小商人や工業組合もそれぞれ読書クラブを作り、貸本屋（Leihbibliothek）も各地存在するようになり、18世紀初頭から新聞・雑誌が準備した潜在的読者層は、地域や身分や階級を越えて知を共有する文芸的公共圏を構成するようになる。

日本では、およそヨーロッパに一世紀遅れて19世紀末から1920年代にかけて一種の読書革命が起きた。

明治20（1887）年前後から書籍取次店網の全国的な整備と郵便制度の発達によって、東京の出版物は地方の読者を新たな顧客として獲得しうることになり、全国規模での読書市場が立ち上がる。永嶺重敏によれば、明治30（1897）年前後には、「読書百遍」、すなわち、限られた小数の聖典的書物を何度も繰り返し読む反復的読書法がすたれ、自分の興味や関心に応じて出版物を選択し、より多くの出版物を広く浅く読む拡散的読書法への変化が現れる<sup>23)</sup>（永嶺 1998, 8）。こうした変化のなかで、「活字コミュニケーションを媒介にして、作家と読者、出版社と読者、読者相互は互いに結びつけられ、お互いを強く意識し始める。『読書社会』<sup>24)</sup>という意識の誕生である」（永嶺 1997, 11）。

19世紀末の日本に生まれた読書社会は、『改造』や『中央公論』のような雑誌が部数を伸ばした1920年代（大正末～昭和初期）に円本ブームが起きたことにより、劇的な変化を経験する。円本ブームの先鞭をつけたのは、1926年に刊行が開始された改造社版『現代日本文学全集』全62巻・別巻1だった。単行本数冊を一冊に収め、近代の作家約380人を収録し、通常的全集の半分から3分の1の定価である1円という値段で予約購読者23万人を獲得、6年がかりで完結した。新潮社の『世界文学全集』など、この後各社も後続企画をあげ、日本

評論社の『現代法学全集』、改造社の『経済学全集』といった専門的な全集までもが数十万部の購読者を獲得し、円本ブームが到来した。永嶺によれば「時には総ふりがな付きの同じ大衆版テキストを、知識人も学生もサラリーマンも、そして一部の労働者・農民も読むことによって、読書体験の均一化・平準化が進んだ。読書生活における知識人・大衆といった階層間の差異、都市・農村間の距離が次第に縮小していった」（永嶺 2001, 150）。「円本ブームを経験することによって、日本社会の読書風景は一変した。円本ブーム以前に人々の身近な読書材料として存在していたのは、新聞雑誌を除けば講談本のみであった。しかし、円本ブーム以後においては、古今東西の文学思想の良質な巨大ストックが各階層の身近なところに大量に蓄積された。人々の読書環境は格段に向上した」（永嶺 2001, 156）。1927年に、ドイツのレクラム文庫（1867年創刊）に範をとった岩波文庫が創刊し、成功を収めると、改造文庫（1929年創刊）、春陽堂文庫（1931年創刊）などが続き、この頃に読者層の底辺は質量ともに大幅に広がった。文芸的公共圏というべきものが日本にも形成されたのである。

書物の大量生産・大量消費による読書社会の底辺の拡大は読書の大衆化・平準化をもたらしたが、その過程に絡みつくように見え隠れしているのは、教養主義という理念である。

読書が、教員・官公吏・サラリーマンといった中間的階層を含む少数の知識階級の特権でなくなると、「大正期を通じて進行した、非読者であったはずの労働階級の読者層への新規参入という新たな事態は、それまで自明のものであった読書階級意識に深刻な動揺を引き起こさざるを得なかった」（永嶺 2001, 205）という指摘に注目しよう。彼らの動揺の背景にあったものは、明治末期から大正期にかけて、ヨーロッパ、殊にドイツを範として成立した教養主義の理念にほかならなかった。教養主義は、顕在的には哲学や文学、歴史などの人文書の読書を中心とした人格主義だったが、その潜在的動機は、「農村社会を後背地にしながら、西洋文化の香りによってひとびとを誘惑し差異化する知識人文化」

(竹内 1999b, 115) を身につけることによってエリートの仲間になるという立身出世主義であった。つまり、教養という無償の行為は、「身分文化となり仲間集団以外のものを差異化し、排除する機能」(竹内 1999a, 257) をもっていたのである。

読書の大衆化・平準化によって、教養主義という背骨に打撃をうけた知識階級は、その危機に対応するために、「大正半ば以降改めて自らを読書階級として再構築する戦略にとりかかる」(永嶺 2001, 206)。彼らの戦略とは、まず講談雑誌の読者である大衆的読者からの差別化を可能にする『中央公論』『改造』『文芸春秋』といった総合雑誌の読者となることであったが、読書習慣を獲得した労働者のなかには総合雑誌の読者となる者も現れた。そこで、彼らは非知識階層より多くの書物を所有し、より多く読書する行為によって知識階級という実質を担保しようとしたのだが、大正期を通じて進行した社会的・文化的平準化により、そのような彼らの差異化戦略も次第に非知識階層に侵食されていく。

階層間や地域間の壁を突破するようなベクトルと、知識階層が堡壘を守ろうとするベクトルの拮抗の上にせりあがっていった日本の文芸的公共圏の地盤は、戦時中の文化の抑圧を受けて一旦沈下し、戦後に再び盛り上がるのだが、低学歴者の存在を前提とする農村型社会から都市型社会への移行と、経済高度成長による大学の大衆化の傾向が顕著になる1960年代には教養主義が風化し始め、それとともにふたつのベクトル間の緊張も失われる。1960年代後半に始まったいわゆる大学紛争が終息する1970年代半ば頃には、さまざまな権威の失墜とともに、教養主義に根ざしたベクトルはほぼ消滅してしまったのである<sup>(29)</sup>。

二つのベクトルの一方の消滅は、両者の緊張関係の上に成り立っていた文芸的公共圏の衰退をも意味していた。20世紀末の電子メディアの台頭による知の地層の揺れは、このような地殻変動の進行の果てに起きたひとつの現象であるに過ぎない。

吉見は、1920年代以降の日本における歴史的展開について次のように要約し

ている（吉見 2000, 14-16）。それ以前からの識字率の高さと大手出版社による大量生産体制が結びついて、ナショナルな規模の読者共同体（前衛的な知識人と大衆的な読者をつなぐ、ゆるやかな言論空間）が成立し、基本的にはこの体制が、戦後も連続的に1970年代まで続いていく。そうした出版市場を通じて作られてきた文化的公共圏が、いまやほとんど機能しなくなりつつある。しかし、共通の文化的、政治的、社会的問題が広く開かれた場で語られ、論じられるべき必要性はいささかも減少していない、と。そして、このような認識から吉見は、市場の論理と文化の論理の幸せな結合の底にはナショナルな基礎があったのであり、それが揺るがせられている現在、読書をパーソナルな行為としてではなく、社会的、集合的な実践として捉えるならば、ローカルであると同時にグローバルな機構を手がかりに、パブリックな文化を支えていくさまざまな非商業的な仕組みの可能性を考えていくべきだ<sup>200</sup>、と提言している。

文芸的公共圏は、マクロに見るならば、社会的な機構の上に形成されるものであり、ヨーロッパにおいてもおよそ200年、日本においてははたかだか100年ほど文化の地平を覆っていたに過ぎないが、ミクロに見れば、前章で見たように、本質的に引用の織物であるテキストを書く・読むという行為そのものなかに存在している。あるテキストを書くということ、また、ある著者のテキストを読むということは、その当事者が担い、彼を構造化している伝統や社会の種々のコード網という公共圏に参入することだからである。その意味では、文字使用の起源や卷子本の時代まで遡らなくとも、冊子本が登場してからだけでもおよそ2000年、グーテンベルクの活字印刷術の発明を起点としても500年以上にわたり、人間が営々と続けてきたモノを書き、読むという行為の歴史は文芸的公共圏の拡大の歴史でもある。

映像メディアや音声メディアによりある種の文化的公共圏というべきものが形成されることがあるとしても、それが文芸的公共圏の代わりを果たすことは

できない。われわれの思考は、言語－文字－テキストという系列の上に作り上げられた枠組みのなかにあるからであり、W・J・オングのいうように、「書くことを内面化した人は、書くときだけでなく話すときも、文字に書くように話す。つまり、かれらは、程度のちがいはあれ、書くことができればけっして知らなかったような思考やことばの型にしたがって、口頭の表現までも組織しているのである」(オング 1991, 123)<sup>27)</sup>。

文芸的公共圏はまた、多種多様の人間がある時期に特定の本を一斉に読む、ということ成立要件としているわけではない。ヒトラーの『わが闘争』のような本をすべての人間が読んで影響を受けるといった状況を想像すればよい。むしろ、そのような事態に対抗するような言論空間の基盤をなすべきものである。いうまでもなく、ナショナルな地平を文芸的公共圏が覆っていた時代においても、すべての国民が本を読んでいたわけではない。ピラミッド状に、本をまったく読まない基層の上に、単なる娯楽や精神的な養分を得るために本を読む層があり、その上に、論理的な複雑さをもつ難しい本にも関心を向ける層、さらに、それをきちんと読みこなす層が重なり、吉見のいう「ゆるやかな言論空間」が存在していたのである。

このような性格をもつ文芸的公共圏の衰退という問題を、再度、かつてそれを支えた教養主義と絡めて考えてみよう。知識階層による他の階層との差異化という負の潜在的動機をもち、見せかけの人格主義という側面をもっていた教養主義の消滅は、社会の大衆化・平準化の必然的結果であった。文芸的公共圏がやせ衰えていくこともまた、多様な娯楽やメディアが存在し、本を読む者と本を読まない者との二極化(注17参照)が進んでいる現代社会の必然である。しかし、個々の専門的関心や実用的関心を越え、種々のいわゆる人文書を読むことによって得られるものとしての教養の重要性は、かえって増しているといわねばならない。

1990年代以降急速に展開している大学改革の過程で全般的に現われているのは、国立大学の教養部廃止に象徴されるように、教養課程の縮小による専門教育の拡大、ならびに外国語教育における英語単一言語主義の強化という傾向である。その傾向は、専門性、効率性、実用性の重視に由来している。各専門分野が高度に発達し、必要とされる専門的知識が増大しており、英語ができれば“国際舞台”で情報が交わせるという現実、そうした傾向の正当性を裏づけているかのようである。原子力やバイオテクノロジーなどの科学技術が無事故で運用するためだけでも、あるいはヨーロッパの通貨統合の成り行きを推論するだけでも高度な専門的知識を要することは確かである。

しかし、現代社会を支配しているのは、民族紛争、テロリズム、環境破壊、大きな危険性を孕む科学技術の発達など、文化的背景を捨象し細分化された専門的知識だけでは危機を回避できないような、さまざまな要素が錯綜する問題である。インターネットは、かつて専門家が占有していたような情報を誰もが容易に入手することを可能にしたが、それらの情報はリンクされてはいても、たいいていの場合、それぞれの領域の閉鎖系の内部で関連づけられているに過ぎない。個々の情報はそれだけでは無意味にも等しい。いかに大量であろうと情報それ自体は部分であり、意味は全体との関連において現れるものだからである。現代社会においてなお、横断的にひろく本を読むことが必要である最大の理由のひとつはそこにあるといえるだろう。

経済学者の猪木武徳は、教養教育の軽視の傾向に関して次のように述べている。

「教養の衰退が現代社会に与える影響は意外に大きい。それはマニュアルにはない、非定形的判断のできる人材を育てるための重要な手段の一つを失ったということである。時間という厳しい審判者の裁定をくぐり抜けてきた古典がわれわれに教えてくれるのは、人間と社会についてのマニュアル化することのできない深い洞察であろう。この洞察がいざという時の非定形の判断能力を高

めてくれるとすれば、古典教養を失うことは、そうした判断力をも失うということの意味する。(…) 古典教養の放棄という点にこそ、現代の教育の病、日本の教育の欠陥が存在するのではなかろうか。教育と研究が切り刻まれ、マニュアル化された知識と、野蛮なまでに専門化された研究関心とに支配されるようになったことがその現れである」(猪木 2001, 134-135)

猪木は、たとえば産業の生産現場において、エレクトロニクスを中心とする技術の進歩により労働のマニュアル化・単純化が進むという一般的な展望に反し、段取り作業、新しいプログラミング、故障予知のような非定型的な仕事や変化への対応能力の重要性がますます増大しているというような現状を指摘し、古典教養の実用的価値を述べているのだが、その要諦は、思考にはモデルが必要である、という点にある。

「古典という『形』をもった伝統的知恵の中から、あるいはその知恵を手がかりとして、自分で自分を、そして外的世界を『深読み』すること」(猪木 2001, 157) の重要性を猪木は説いているが、古典に限らず、本質的に伝統や社会に張り巡らされた文化コードの織物である種々の本と向き合うことによってさまざまな思考のモデルを蓄積し、「マニュアル化された知識」や「野蛮なまでに専門化された研究関心」を相対化する複眼的視座をもつことは、現代社会の急務でさえある。電子メディアによる双方向的コミュニケーションにしろ、思考のモデルなしには、単に事柄の表面をなぞるだけの、あるいは閉鎖的な情報交換でしかありえない。

現在の大学教育の現場において、“実用的でない” 科目では、いかに学生の好奇心を喚起するか、いかに授業の内容を面白く感じさせるかということに多大なエネルギーが使われるようになっている。学生による授業評価アンケートには「AV 機器を効果的に利用しているか」という項目が載せられ、外国語教育ではとりわけオーラル・コミュニケーション能力を高めることが要請される。そうした要請そのものに難があるわけではない。しかし、その反面で読む力の養成

がおろそかにされることの帰結を真剣に考えるべきだろう。大衆化したとはいえ、大学が知を担うべき人材を育てるべき場であり続けようとするならば、印刷本であれ電子本であれ、本と向き合うことを教える教養教育を忘れてはならないはずである。

# 註

- (1) 読書革命については、拙論『18世紀末のドイツにおける「読書革命」をめぐる』(『言語と文化』第8号、東北大学言語文化部、1997)を参照。
- (2) 1969年、アメリカ国防総省の研究開発促進部門によって開始されたネット・プロジェクトは、1980年代に入るまでに全米規模の単一ネットワークとして成長していった。1990年代に入り、WWW (World Wide Web) がヨーロッパ合同原子核研究機構で開発され、Mosaic、Netscape、Internet Explorer などそれを図示的に閲覧するためのブラウザが登場し、インターネットの商業利用も認められた。さらに電話線でPCをインターネットに接続することも可能になった。1990年代初めにこれらの要因が揃うと、インターネットに接続したコンピュータの数は急増していった。
- (3) 「出版データブック：1945～2000」(出版ニュース社)による。
- (4) 「出版年鑑2003」(日本書籍出版協会・出版ニュース社)による。
- (5) これら印刷書籍の特性は、しばしばハイ・デフィニション (コンピュータ・ディスプレイよりも解像度が高い)、ユニバーサル・アクセス (だれでも容易に入手できる)、ユニバーサル・ビューワー (機器を使わずに読める) と表現される。
- (6) incunabula (揺籃期本)：1500年以前のヨーロッパの初期活字印刷本
- (7) 引用に用いた邦訳 (ボルター 1994) では、「テキスト」であるが、他との統一性を考慮し「テクスト」にかえた。
- (8) たとえば日本語の電子書籍は、学習研究社、角川書店、講談社、光文社、集英社、祥伝社、新潮社、筑摩書房、中央公論新社、徳間書店、双葉社、文芸春秋社の共同による「電子文庫パブリ」(<http://www.paburi.com/paburi/about.asp>) や、Voyger Japan (<http://www.voyager.co.jp/>) といったオンライン書店、また無料で利用できるインターネット電子図書館「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>) などからダウンロードすることができる。「青空文庫」は著作権の切れた作品と、著作権者が公開を認めた作品を電子化して提供しているが、著作権が消滅した作品を無料で公開するという活動は、「グーテンベルク計画」(Project Gutenberg) を嚆矢とする。グーテンベルク計画は、マイケル・ハートが1971年にはじめた電子テキストのアーカイブをつくる試みである。著作権が消滅した文献を電子テキスト化し、現在インターネット上で無料で公開している。アメリカ独立宣言から聖書、『ピーター・パン』まで幅広いジャンルをあつかい、テクストの数は現在およそ2000。非営利活動であり、運営は有志や寄付金によってささげられている。
- (9) たとえば、ネルソン (1994) 参照
- (10) コデックスは、古代ローマにおいて、蠟を塗った木の板の上に文字を記し、本のように閉じたものとして始まり、5世紀頃にはほぼ全面的に卷子本にとって代わったといわれている。
- (11) R・シャルチエは、書籍の構造変化や読書の実践の仕方に大きな変化をもたらしたものとして、印刷術の発明以上にコデックスの発生と進化を書物史上における重大な出来事とみなしている (シャルチエ 1992a; 38以下)



- (12) アドヴェンチャー・ゲームもハイパーテキストも、読みながら探求することのできるシミュレーション世界を構築するから (Bolz 1993, 223) というのがその理由である。
- (13) 異なるデータベースの間のリンクが張り巡らされた新しいテキスト社会 (オンライン世界図書館) を意味するテッド・ネルソンの造語。
- (14) 「文芸」は、狭義の「文学」ではなく、広義の「文物と学芸」、つまり、ものを書く行為全般を意味している。
- (15) 1999年から、アメリカ学術団体協議会が中心となり、5つの歴史学会と10の大学出版部がアン・ドリュエ・W・メロン財団から巨額の資金援助を得て始められた大規模プロジェクト “History E-book” は、ダーントンの提言を実践に移したものであるという側面をもっている。http://www.hisotryebook.org/ および 山本俊明「学術書電子書籍 Ebook 出版の動向—新しい本のかたちを創り出す試み」(『大学出版』51号, 2001, 大学出版部協会) 参照。
- (16) たとえば, Saxer u.a. (1989), Fritz (1990), Stiftung Lesen (Hg.) (1993), Schön (1996)
- (17) 各種の読書調査を解説した永江朗によれば、日本でも同様に「本を読む人はますます読み、読まない人はまったく読まない二極化が進んでいる」(永江 2002, 20)。なお、ドイツには、他の国には見られない読書に関する二極化も見られる。新諸州 (旧東ドイツ) と旧諸州 (旧西ドイツ) のそれである。1990年のドイツ再統一前後の読書調査によると、新諸州では壁が崩壊した1989年以降、旧諸州以上に読書が行なわれている (Stiftung Lesen 1993; Hofmann 1996, 39)。出版に対する規制や書籍流通事情の変化がその主たる原因のひとつだが、その点で類似する中国でも、1999年に中国出版科学研究所が行った「全国閲読意識調査」によると、活字メディアの地位は相対的に低下し、一人一人の読書時間は減っているものの、全体ではむしろ読書人口が拡大する傾向が見られるという (劉 2000)。
- (18) 花田達郎は『公共圏という名の社会空間』(木鐸社 1996) において、ハーバーマスの “Öffentlichkeit” を、言説や表象が交差する空間として捉えて「公共圏」という訳語を与えている。小論の「文芸的公共圏」も花田の論に従ったものである。
- (19) 読書熱については、拙論「18世紀末のドイツにおける「読書革命」をめぐる」(『言語と文化』第8号, 東北大学言語文化部, 1997) 参照
- (20) ドイツではいわゆる文学書の割合は、1740年には書籍生産の5.8%だったものが、1770年に16.4%, 1800年には21.4%になったと見積もられている。(Schön 1987, 44; Ungern-Sternberg 1980, 135)
- (21) 読書熱に対する批判の典型的な例をハインツマンという保守的人物の『我が国民へのアピール』(1795年)の次の一節に見ることができる。
- 「世界ができてから、ドイツにおける小説熱とフランスにおける革命ほど奇妙な現象がかつて存在したことはなかった。この二つの極端な現象はほぼ同時に手を携えて成長してきたものである。恐ろしいフランス革命が公の場で行なったのと同じ程度に、小説が密かに人々と家庭を不幸にしたというのは、絵空事ではない。これから伸びてくる世代に見られる不道德、真面目な事柄に対する嘲り、何にでも手を出してしまう軽薄さ、宗教の軽視、官能の動物的衝動といったものが、小説を読むという行為で蔓延したことを考えるならば、予測される結末は、昔ながらの純真な慎ましい考え方のなかに根幹を揺るがすような事件、すなわち革命が起こるに違いないということ、そして、後に続く世代が、われわれが今そうであるよりもはるかに惨めな状態に陥るであろうということにはほかならない。(…)

毎年ドイツでは、少なく見積もっても、300ほどの新しい小説が出版されている。5, 600冊ほど出版された年もあり、新旧の歴史、モラル、宗教、哲学、国政術、ほぼすべてのドイツ文芸

が小説というかたちで扱われてきている。(…) 毎年数え切れないほどの大量の書物が出てきて、それらによって筆舌に尽くしがたいほど多くの、捏造され、常軌を逸した悪意のある判断や考えが広められ、真の啓蒙やフマニテートや人間の真の幸福にとって越えがたい障害となっている。

小説耽読の帰結をさらに考察すれば、もっと多くの非難すべきことが見いだされる。男でも女でも、若い人々にとって、時間は長くなり、彼らは役に立つ仕事もせず、怠惰にして小説を読んばかりいる。小説のなかで、まだ陶冶されていない理性は空想のあらゆる迷路に導き入れられる。そこでは至る所に妖精たちの宮殿が扉を開けており、魅力的な徳のイメージ、超人間的な完全さ、魅惑的な無邪気さが現れてくる。これらのかろうじて高貴なイメージは彼らを甘やかし、現実の生から目を背けさせ、不機嫌と無関心へと彼らを陥らせる。(…) 彼らはもはや現実の世界に生きてはいない。彼らは空想の至高の夢のなかで隣人から引き離されているのである」(Wittmann 1991, 186以下の引用による)

- (22) ヨーロッパでは、まず9世紀から11世紀にかけて修道僧が音読の習慣を失っていき、13世紀に大学人に黙読が広まり、14世紀半ばには貴族層も黙読をするようになった。(シャルチェ 1992b, 96)

- (23) 永嶺は、明治32(1899)年の総合雑誌『太陽』5巻7号に載った高浜樗牛の「読者の態度」と題する時事評論の次の一節をあげている(永嶺 1997, 8)。

「古と今と、読者の態度全く異なり。古の人は読書百遍意自ら通ずと云えり、今は即ち然らず、読過一遍意少なくて通ぜざれば即ち晦渋不通の悪文として退けらる。今の人に在って、一切の書を読むの覚悟は即ち日刊新聞を読むの覚悟也」。

- (24) 永嶺は、明治20年代後半から30年代に「読書社会」「読書世界」「読者社会」「読書界」といった言葉が、以前の「書生社会」に代わって、とくに文学雑誌等で広く使われたことを指摘している(永嶺 1997, 11)

- (25) F・リンガーは『読書人の没落』(リンガー 1991)において、ドイツの知識階層も同様の道をたどったことを描き出している。リンガーが「読書人階層」と呼ぶのは、医師、弁護士、聖職者、国家官吏、中等学校教師および大学教授といった「世襲の権利や富ではなく、主として教育上の資格証明によって身分を得た社会的、文化的エリート」(リンガー 1991, 4)である。彼らは教養＝人格の陶冶という理想を掲げていたが、それはやはり裏面において権威や官僚制と密接に結びつき、他の階層との差異化という機能をもつものであった。18世紀に現われた「読書人」たちは、農業国だったドイツが工業国へと急速に発展する1870年代に文化の地すべりの現象に見舞われ、1920年代には文化・学問・価値・精神の「重大な危機」(リンガー 1991, 2)を生きていると感じ、必死の抵抗を試みる。しかし、機械化と大衆化によって危機にさらされた彼らの教養主義は、ある種の実利主義が支配していたナチスの時代を経て、戦後の民主化と大衆化の進展とともに急速に消滅していく。「読書人的知識人は気がついてみると、自分たちのあらゆる価値に異を唱える社会的、文化的環境の中にいた」(リンガー 1991, 302)のである。

- (26) 具体的に検討されるべきこととして吉見があげているのは、公共図書館、博物館、美術館、文化センターなどの公共文化施設がいかなる役割を果たしうることか。また、地方の書店がどのような地域文化の担い手となるのか。いかなる新しい本の流通機構が組織されていかなければならないのか。学校やNGO、NPOなどのネットワークがそれぞれの文化的、社会的実践と新しい出版と読者の仕組みをどのようにつないでいくことができるのか、等々である。

- (27) オングは『声の文化と文字の文化』(オング1991)において、口承文化の表現形式とグーテンベルク以降の活字文化のそれとを比較し、非識字社会と識字社会の人間の認知や思考のあり方の違いを論じている。両者の知的能力や思考様式の間に大きな違いがあるという、オングらの大分水

嶺理論 (The Great Divide Theory) 自体は、その検証方法等の問題など、すでに多くの見直しをせまられているが、活字文化に続く電子情報文化もまた、言語—文字—テキストという系列の上に作られた枠組みから自由ではなく、われわれが「書くことを内面化した」存在であるというオングの指摘は疑いを入れない。なお、大分水嶺理論とその問題点については、茂呂雄二『認知科学選書16 なぜ人は書くのか』(東京大学出版会, 1988) に詳しい。

#### 参考文献

- Bolz, Norbert (1993) : Am Ende der Gutenberg-Galaxis. Die neuen Kommunikationsverhältnisse. München
- Bolz, Norbert (1994) : Computer als Medium. [Einleitung] In: Norbert Bolz / Friedrich Kittler / Cristoph Tholen (Hgg.) : Computer als Medium. München; S. 9-16
- Bonfadelli, Heinz / Saxer, Ulrich (1986) : Lesen, Fernsehen und Lernen. Wie Jugendliche die Medien nutzen und die Folgen für die Medienpädagogik. Zug
- Bonfadelli, Heinz / Fritz, Angela / Köcher, Renate (1993) : Lesesozialisation. Bd.II: Leseerfahrungen und Lesekarrieren. Gütersloh
- Darnton, Robert (1999) : The New Age of the Book. In: The New York Review of Books. March 18, 1999 \*引用には、幾島幸子訳「本の新たな時代」(『みすず』459号, 1999 <http://www.msiz.co.jp/monthlyreview/tatuyomi10.htm>) を参照した。
- Dilthey, Wilhelm (1957) : Die Entstehung der Hermeneutik (1900) In: Gesammelte Schriften. Bd.V. Stuttgart u.a.
- Engelsing, Rolf (1974) : Der Bürger als Leser. Lesergeschichte in Deutschland, 1500-1800. Stuttgart
- Fish, Stanley (1980) : Is there a text in this class? : The authority of interpretive communities. Cambridge, Mass.: Harvard University Press (このクラスにテキストはありますか。小林昌夫訳 みすず書房, 1992)
- Foucault, Michel (1966) : Les mots et les choses. UNE ARCHÉOLOGIE DES CIENCES HUMAINES. Éditions Gallimard (言葉と物 — 人分科学の考古学。渡辺一民・佐々木明訳, 新潮社, 1974)
- Frank, Manfred (1985) : Was ist ein literarischer Text und was heißt es, ihn zu verstehen? In: Jutta Kolkenbrock-Netz / Gerhald Plumpe / Hans Joachim Schrimpf (Hgg.) : Wege der Literaturwissenschaft. Bonn
- Fritz, Angela (1990) : Leseforschung in einer Mediengesellschaft. Überblick über den Stand der Forschung Ende der 80er Jahre im deutschsprachigen Raum. In: IASL (Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur) 15, H.2
- Gadamer, Hans-Georg (1977) : Vom Zirkel des Verstehens. In: Kleine Schriften IV. Variationen. Tübingen
- Gadamer, Hans-Georg (1970) : Artikel „Hermeneutik“. In: Historisches Wörterbuch der Philosophie. Hg. von Karlfried Gründer u. Joachim Ritter. Bd. II. Basel u.a.
- Habermas, Jürgen (1979) : Strukturwandel der Öffentlichkeit — Untersuchung zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft. Neuwied 1979 (Erste Auflage 1962) (公共性の構造転換。細谷貞夫訳, 未来社, 1973)
- Hoffmann, Hilmar (1996) : Zwei Kulturen im Zusammenstoß. Erkundungen im Medienland über ein Leseland. In: Dirk Matejovski / Friedrich Kittler (Hgg.) : Literatur im Informationszeitalter. Frankfurt/Main

- Horxs, Matthias (1991) : Das Wörterbuch der 90er Jahre. Ein Gesellschaftspanorama. Hamburg
- Jauß, Hans Robert (1970) : Literaturgeschichte als Provokation. Frankfurt/Main (挑発としての文学史. 轡田収訳 岩波書店, 1976)
- Kiesel, Helmuth / Münche, Paul (1977) : Gesellschaft und Literatur im 18. Jahrhundert. Voraussetzungen um Entstehung des literarischen Marktes in Deutschland. München.
- Kittler, Friedrich (1996) : Computeranalphabetismus. In: Dirk Matejovski/Friedrich Kittler (Hgg): Literatur im Informationszeitalter. Frankfurt/Main u.a.
- Luhman, Niklas (1992) : Funktion der Religion. Frankfurt/Main
- Postman, Neil (1998) : Wir amüsieren uns zu Tode. Urteilsbildung im Zeitalter der Unterhaltungsindustrie. Aus dem Amerikanischen übersetzt von Reinhard Kaiser. Frankfurt/Main
- Saxer, Ulrich / Langenbucher, Wolfgang / Fritz, Angela (1989) : Kommunikationsverhalten und Medien. Lesen in der modernen Gesellschaft. Eine Studie der Bertelsmann Stiftung. Gütersloh
- Schlegel, Friedrich (1981) : Fragmente zur Literatur und Poesie (1979). In: Kritische Ausgabe. Hg. von Ernst Behler. Bd.16. Zweite Abteilung: Schriften aus dem Nachlaß. Paderborn u.a.
- Schleiermacher, Friedrich Daniel Ernst (1959) : Hermeneutik. Hg. von Heinz Kimmerle. Heidelberg
- Schleiermacher, Friedrich Daniel Ernst (1977) : Hermeneutik und Kritik. Mit einem Anhang sprachphilosophischer Texte Schleiermachers. Hg. u. eingel. von Manfred Frank. Frankfurt/Main
- Schenda, Rolf (1977) : Volk ohne Buch, Studien zur Sozialgeschichte der populären Lesestoffe 1770-1910. München
- Schön, Erich (1987) : Der Verlust der Sinnlichkeit und die Verwandlungen des Lesers. Mentalitätswandel um 1800. München
- Schön, Erich (1996) : Zur Zukunft des Lesens im Medienzeitalter. Konstanz 1996
- Stiftung Lesen (Hg.) (1993) : Leseverhalten in Deutschland 1992/1993. Repräsentativstudie zum Lese- und Medienverhalten der erwachsenen Bevölkerung im vereinigten Deutschland — Zusammenfassung der Ergebnisse. Mainz
- Todorov, Tzvetan (1973) : Poetik. In: Einführung in den Strukturalismus. Hg. von Francois Wahl, übersetzt von Eva Moldenhauer. Frankfurt/Main
- Ungern-Sternberg, Wolfgang von (1980) : Schriftsteller und literarischer Markt. In: Rolf Grimminger (Hg.) Sozialgeschichte der deutschen Literatur. Bd.III: Deutsche Aufklärung bis zur französischen Revolution. München
- Wittmann, Reinhard (1991) : Geschichte des deutschen Buchhandels. München
- イーザー, ヴォルフガング (1982) : 行為としての読書. 美的作用の理論. 轡田収訳, 岩波書店 (Wolfgang Iser: Der Akt des Lesens. Theorie ästhetischer Wirkung. München, 1976)
- 猪木武徳 (2001) : 自由と秩序 — 競争社会の二つの顔. 中央公論社
- 萩野正昭 (2002) : 二〇〇一年, ついに人は電子の本を読む。(加藤典洋編「読書は変わったか?」所収) トランスアート
- オング, ウォルター・J (1991) : 声の文化と文字の文化, 桜井直文他訳, 藤原書店 (Walter J. Ong : Orality and Literacy. The Technologizing of the World. Methuen, 1982)
- シャルチエ, ロジェ (1992a) : 読書の文化史, 福井憲彦訳, 新曜社
- シャルチエ, ロジェ (1992b) : 書物から読書へ. (シャルチエ篇「書物から読書へ」所収, 水林章他訳, みすず書房) (Pratiques de la lecture sous la direction de Roger Chartier. Editions Rivages, Paris, 1985)

- シャルチエ, ロジェ (1996): 書物の秩序. 長谷川輝夫訳, ちくま学芸文庫 (Roger Chartier: L'ordre des livres. Lecteurs, auteurs, bibliothèques en Europe entre XIV<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> siècle. 1992)
- シャルチエ, ロジェ (2000): 読者は死んだのか? (「人はなぜ, 本を読まなくなったのか?」所収) トランスアート
- シャルチエ, ロジェ (2001): なぜ「本の歴史」を語るのか? 龍澤武訳 (季刊「本とコンピュータ, 2001冬号」所収) トランスアート
- セルトー, ミシェル・ド (1987): 日常実践のポイエティック. 山田登世子訳, 国文社 (Michel de Certeau: L'invention du quotidien, 1, Arts de faire, UGE., coll. 10/18, 1980)
- 竹内 洋 (1999a): 学歴貴族の栄光と挫折 (日本の近代12), 中央公論社
- 竹内 洋 (1999b): 教養知識人のハビトゥスと近代 (日本近代文化論4 知識人), 岩波書店
- 永江 朗 (2002): 誰が本を読まなくなったのか? 読書調査を読む. (加藤典洋編「読書は変わったか」所収) トランスアート
- 永嶺重敏 (1997): 雑誌と読者の近代, 日本エディタースクール出版部
- 永嶺重敏 (2001): モダン都市の読書空間, 日本エディタースクール出版部
- ネルソン, テッド (1994): リテラリーマシン ハイパーテキスト原論. 竹内郁雄他訳, アスキー
- 橋本良明・辻大介・森康俊・柳沢花芽 (1999): インターネット個人加入者の実態 1998. 東京大学社会情報研究所調査研究紀要 12号
- バルト, ロラン (1979): 物語の構造分析. 花輪光訳, みすず書房 (Roland Barthes: Introduction à l'analyse structurale des récits. [Selection 1] Editions Seuil, Paris, 1961-71)
- フーコー, ミシェル (1990): 作者とは何か? 清水徹/豊崎光一訳, 哲学書房 \*引用は翻訳にしたがっているが, 「です・ます」調を「である」調にかえた. (Michel Foucault: Qu'est-ce qu'un auteur? - Société française de philosophie; 22 février 1969- Bulletin de la Société française de Philosophie. 63<sup>e</sup> année, n°3, juillet-septembre 1969)
- ボルター, ジェイ・デイヴィッド (1994): ライティングスペース. 黒崎政男・下野正俊・伊古田理訳, 産業図書 (Jay David Bolter: Writing Space. The Computer, Hypertext, and the History of Writing. Lawrence Erlbaum Associate Inc., 1991)
- ランドウ, ジョージ・P (1996): ハイパーテキスト. 若島正他訳, ジャストシステム (George P. Landow: Hypertext. The Convergence of Contemporary Critical Theory and Technology. The Johns Hopkins University Press, 1992)
- リンガー, フリッツ・K (1991): 読書人の没落 — 世紀末から第三帝国までのドイツ知識人. 西村稔訳, 名古屋大学出版会 (Fritz K. Ringer: The Decline of the German Mandarins. The German Academic Community, 1980-1933. Harvard University Press, Cambridge Massachusetts 1969)
- 劉 志明 (2000): 本の読者層は拡大している. (「人はなぜ, 本を読まなくなったのか?」所収) トランスアート
- 吉見俊哉 (2000): 本のかわりに, 何が文化的公共圏を支えるのか? (「人はなぜ, 本を読まなくなったのか?」所収) トランスアート